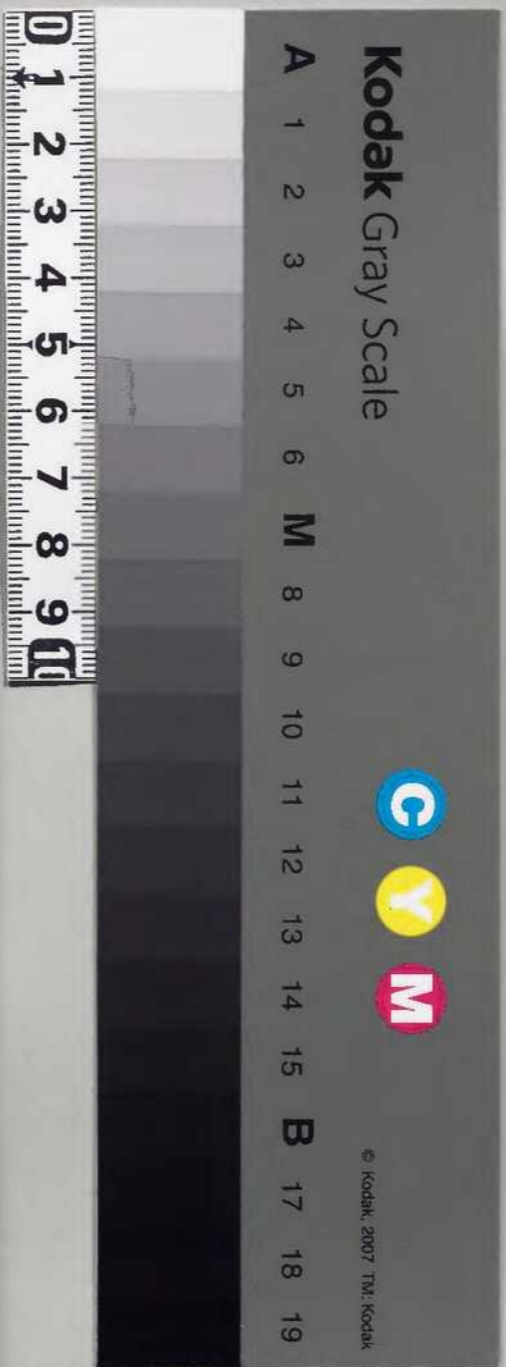
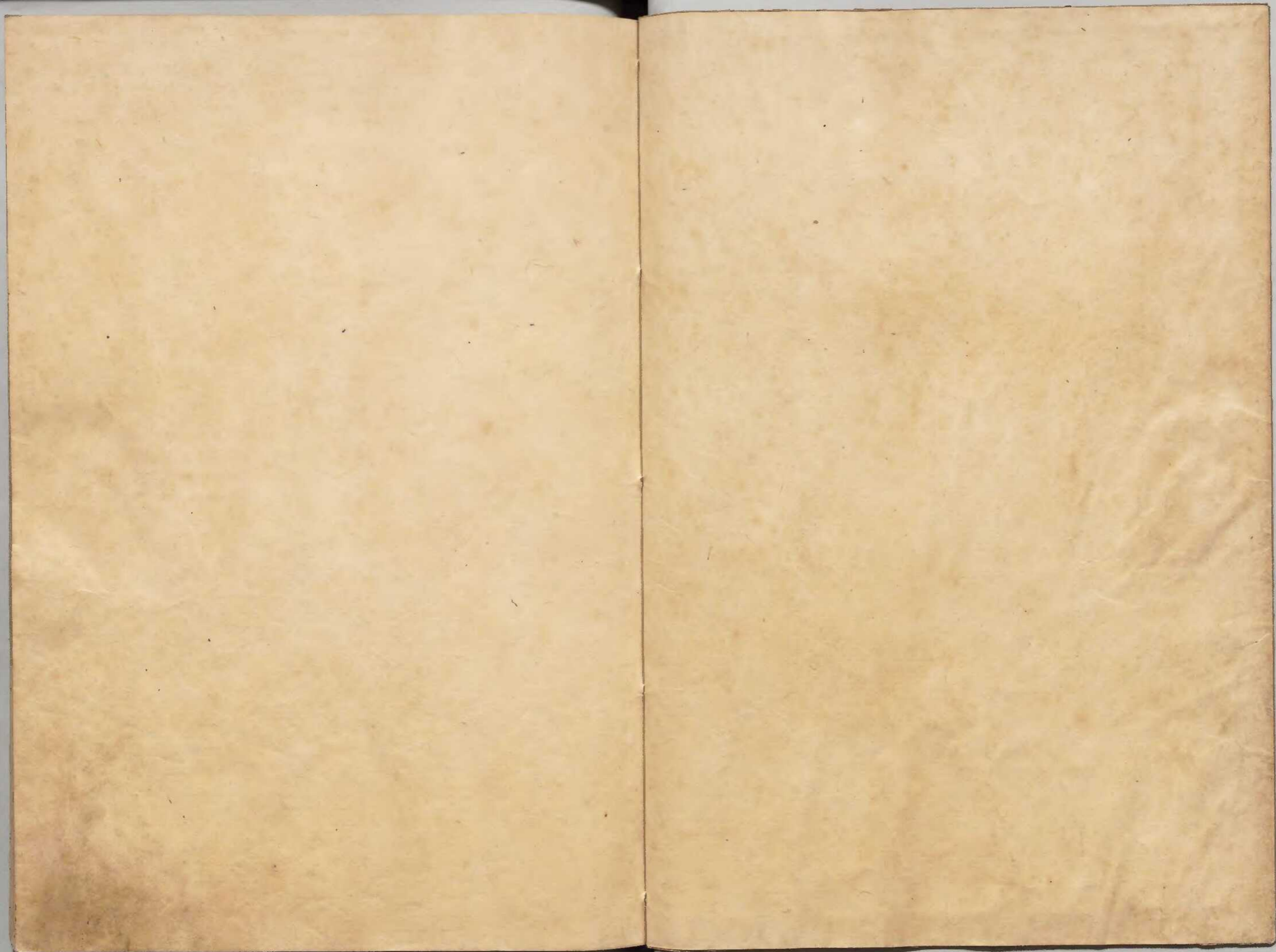


寛永諸家譜

清和源氏庚八冊之内
義光流之内武田流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186	(42)	
函號	76	1	





伴次
小尾
津金
酒依
高尾
新見
牛奥

寛永諸家系為傳

清和源氏

義光流

伴澤

伴次五郎信光が後胤なり

庚六

淺草文庫

政重

吉吉房

生國三列

東照大権現小行入在くすの家

天正十八年とだろん小田原陣こゝろ乃と記

台徳院殿たいとくゐん乃御鑑ごかん奉行しやうぎやうとうけたすつりく

信しん守しゆと

同年このと關東かんとう御入ごいれ承うけ乃と記しる鑓や籠かご乃足あし輕かろ

四十人よじゅうにんと河川かへん者ものら家け

慶長十二年けいぢやうにじふに六月むね十四じふよ日にち某あつ少すくく病やま死し法はふ名な

淨じやう白はく

政信せいしん

台たい吉きち清せい 年人ねんじん正せい法はふ五ご信しん下げ 生なま國くに武ぶ藏ざう

實まこと八はち井い氣き多た橋はし浦うら高たか原はら昌あき右みぎ左ひだり乃なり嫡ちやく子こなり

政せい重じゆう春はる子ことなりたりて家いへ將しやうとなり法はふ々々政せい重じゆうハ

母はは方かた乃なり祖いそ父ちちなり政せい信しん幼わらわ少せう乃なりとなりまなりより

台徳院殿たいとくゐん乃なり法はふ々々となり

慶長九年けいぢやうにん御小姓ごせうじやうとなりたなり家け

大坂おおさかあななり乃なり御陣ごじん乃なり信しん守しゆと

元和六年げんわに御ご法はふ五ご信しん下げ乃なり叙しよと

之後のち加から同心どうしん二十人にじゅうにん河川かへん乃なり又また御ご

字えん をい
中院書院此組以となりて

將軍家へは久たくまの家

政成 まさなり

右書院 生員同家

寛永九年

將軍家へ召出され よみ 洋湯 を

同十五年正月より御書院書と勅 まをえん じ

政勝 まさかつ

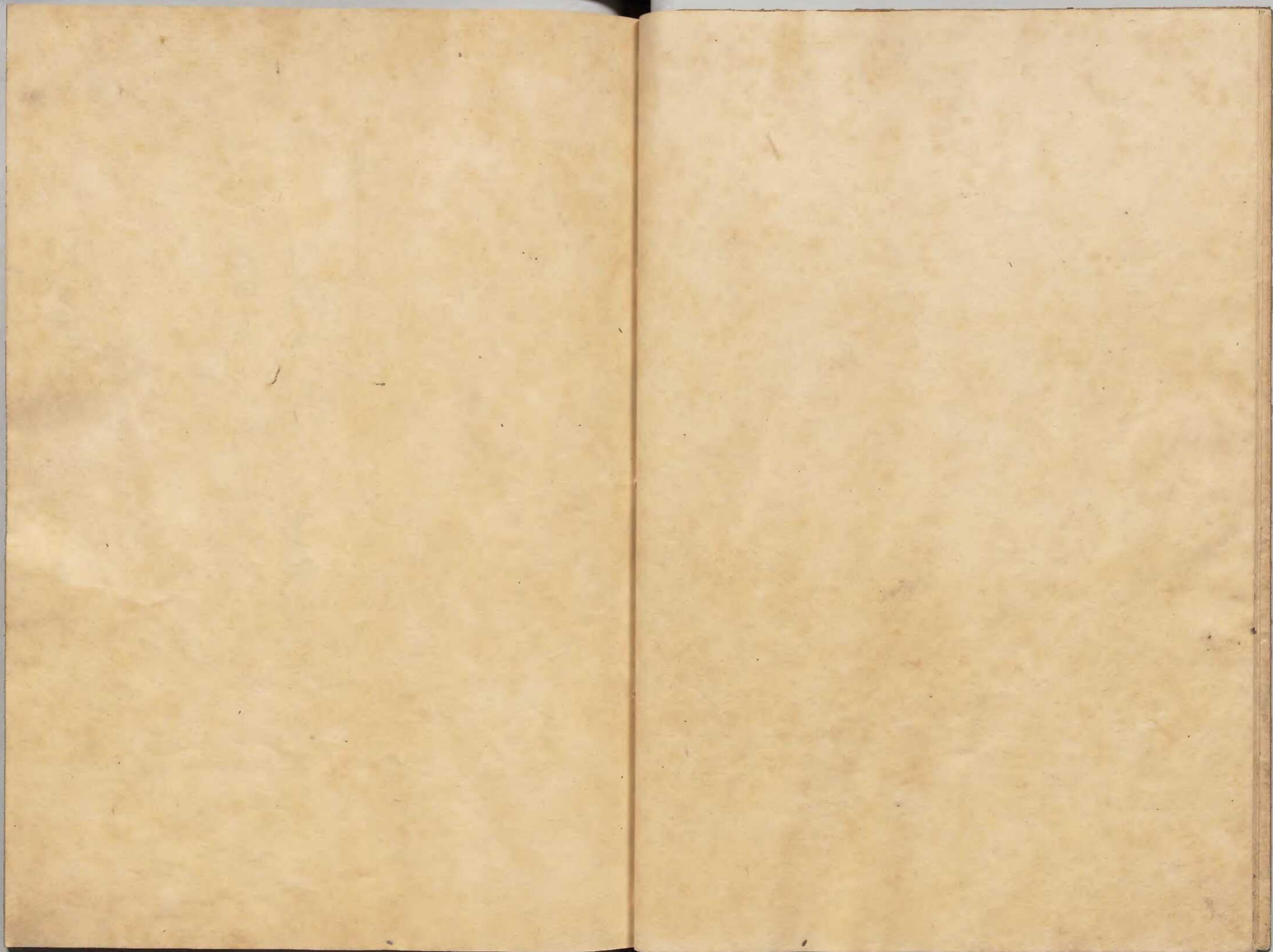
源 げん 照 のり 生員同家

寛永十二年

將軍家へ召出さされて御小姓 こしやう 乃御書

と勅 まをえん じ

家紋 いざな 友 とも 巻 まき



某 あ

小尾 とび

津金 つぎ

依竹 よたけ 英流書

生園 せいえん 信列

武田氏 たけだのうぢ 了

某

津金 つぎ 射子舟 しよぶね

生園 せいえん 甲列

武田信虎より信玄の依所と稱す所を津合
と稱す津合の領地乃名なり

胤時

美濃守 生國同家

信玄 勝頼 父子より

永禄四年 川中嶋合戦乃討首級と得

しり

同十二年 信玄 勝頼 父子 小田原へ發向

此とき之増小おわく敵とうちとり 疵

とくうし家

天正二年六月廿一日 長篠より松平へ討

死 五十五歳 法名道蓮

祐光

小尾 造物 生國同家

小尾 周防 知算とたりて之を基跡とす

津合と河より 小尾と稱す周防と

信玄勝頼よりしるし 信列比企乃城より
より小尾ハ武田乃應族なり

天正十年二月七日信長比企甲兵衛
殺向乃とき比企乃城よりおのて 岡坊

討死を同十一日勝頼自殺を
永禄四年川中瀉合戦のと記祐光
甲首と得たり

同十一年十二月六日後列花法乃城より
おのく首級と得たり

同十二年三増合戦のと記甲首一級と
うらと家

元龜二年三原合戦のと記甲首
二級と得たり

天正二年長祿合戦乃附首級と得たり
同八年九月三川あ乃城よりおのく敵と

うちとり敵ヶ取の敵とくう少敵
同十年勝頼朝内よりおのく附祐光也

こまよあさかんをりと勝頼祐光城

とめく本名氏此人質と云ふ事一む
甲列落居乃後津金此御ハ信列の境

ふるにより小糸氏並よりことと云く

とてくまのくといとも祐光なるびよ

津金修理胤久二事よみせとて阿

祐光九郎と奏者とて祐光胤久二

人妻子と人質と御して

東照大権現乃幕下ノ属也

大権現人質此御扶持とて後列曲令

と海ありよおわく御地有るびよと頼と

清の家

同年七月九日御朱印と以戴一いすに

所持と

同年

大権現甲列ノ所發向乃と如小糸氏並

着赤子色よ出しひく射陣と

大権現江草此根小屋乃とり出とせり給ふ

祐光たすびよ子産九郎首級と

得り胤久彦なほいさうていとあり先陣の案内共うんごよ

とて白草の根小屋とせよやしらくさねこやかり歌うたあり

うらとりてを首と新府とあたらふ新あらたと祐光すけみつ

胤久なほいさとむくむく軍田いくでありより

大権現おほいけんげん二ふたと感かんしたまひ本領の地共ほんりやうのち

外七百七十貫そとしちひゃくしちまな地と祐光すけみつと存ぞんり

四百五十貫よひゃくごじゅうごの地と胤久なほいさと存ぞんり

同年九月十日河内かみ若九郎山本わかくさく常つね口

作つくとつけたすりて民家あま十じゅう石いし此法このりやう没な

免許めんきょ乃御朱のみしゆ下したと祐光すけみつ胤久なほいさと存ぞんりて

ともに足輕あしかろ十人と領りやうと

同月どうげつ廿四日祐光すけみつ胤久なほいさと境さかい北軍士きたぐんしと川

わく忠ちゆう切きりととげとげとあり

大権現おほいけんげん御感ごかんありく御朱のみしゆ下したと祐光すけみつ胤久なほいさ

二人祐光ふたりすけみつが孫まご若小池わかしづみ池いけ祐光すけみつと存ぞんり家いへと

うけつにいとく

甲列かうりつ津つ金かねの五ご拾じゅう八はち貫まな文ぶん根羽ねは之の費ひ七百しちひゃく

文ぶん清せい水すい系けい之の費ひ文ぶん屋や後ご式しき同どう法ぽう没な

先許心と申領村山に式百貫文之條以

五十貫文比志以才之貫文比之新知行

右所記之不可有相違以付内記並

是輕十人下合持持志也四也件

天正十年

御朱印 九月七日

安倍善九

山本帯刀

小尾盛持

定

一有之人与申領者有之妻子被友何方

一有之可下也付也事

一津金之而男女牛馬一切不可取事

一境目之者今度志節付与志也事

地可記之

右何之不可有相違也件

天正十年

御朱印

九月廿四日

山本帯刀

阿部善九

七〇〇

小池筑あましく

小尾監物之

小尾監物之

同年佐列 岩尾穴小屋 赤山 石井

旗下小属せざるもの有り

大権現甲列 先方 辰吉 根下 野玉 虫付

令一黨 約井 一黨 今福 和泉 工友 一黨

喜山 右馬 助等 に令下して 二世と

じにねより 翌年 教度 代合 戦有り

同十二年

大権現小牧小御陣とめさるる時 祐光 胤久

ハ真田共おさへして 佐列 結向乃より出

とすもろの 後石よ 應じて 御陣よ 木

まじん 一宮よ おおく 牧野 忠兵衛

よ 属して 御番と 勤む

同十二年 赤と 美田よ 行りて 志よ 美田

城下 海野町と 加こま じ時よ 歎六

保中よりつぎ出て味方まうたに筋せん
と申しと記祐光胤久見才共とて
法率と引ぬく引くる重四より祐光
胤久小池胤あ御並判此書と以載を
はと記祐光胤とかりする御書此写小
いすく

今度おまえ情と入る御共田毎に
も是と申す皮色と怪新委細
阿多若大湯門尉百の地

二月二日御判紙

小池胤あもろ
津金修理亮
小尾監物久

同十八年小田原御陣乃刻共と忠付
小池ハコウ々時祐光胤久も又か二小
おしじさうく大方曲輪小持ちりつる歌共城
中より働さ出ると記味方殿小と祐光
胤久見才かろくせひく鈍と阿多若

徳初又十部討死と祐光首級とゆく鐘
祇二ヶ所とわううらふら浅野陣面か
首帳ふらうて秀吉小旗と是ふら

大権現重切と感トたまびく成徳吉左衛門

目下六右衛門うけたまはり少く二百八十

儀と終るも身と光重今よ二まこと

所持と

同年同東所入心乃と起祐光傳書い

武列源岩なうびと初使河原村

おわく八百六十石と終る胤久も又領地
と存領と

同十九年九部陣乃時祐光胤久

大権現小志さうひちりて若自法よつた

文禄元年朝鮮陣乃時祐光胤久と

すりて江戸小町り

慶長五年系務陣乃と起祐光

大権現乃命よらな多佐渡守正信と奏

若とて

台徳院殿と稱しなり宇部官陣と修す
同十二年武列少く病死年六十六
法名真金

胤久

つひに名を修す
法名修理亮
信玄 勝頼より
父胤時と 信玄に使して去るべく小幡
より勝頼 自教乃と記胤久 弟法

と波乃城よりりて嵩と親じ是後

大権現よりなり甲列 信列乃よりなり
らびより小田原九郎等よりおぬく先
先と同く 宇田河ら事先小尾監物
裕光 藩中よりなり

五七五

台徳院殿宇部官陣乃と記

大権現乃命とつけたるより此目付少く
宗より小下向より後

胤なご
卜うらなひ

大権現此作より尾列義直郷小治ふ
胤なご久ひさの領地とハ子胤なご卜うらなひと給たまふ

元和八年八月十八日病死七十七歳

胤なご色いろ 生なま甲かみ装まむらひ

右座院殿小治人たぐり家知行と評

願ねが一いつ御書院ごしょいん為なと勅とちうじ

寛平五年二月十一日死を二十九歳

胤なご
清きよ

胤なご色いろ 武列ぶれつ江戸えど小生こせい

右座院殿小治人たぐり家知行と父のき跡
とけき御書院ごしょいん為なと勅とちうじ

光みつ
重しげ

仁左衛門 生なま甲かみ装まむらひ

天正十八年小田原御陣の時初め

大権現と評——なる家

同十九年九部法陣の時老重らうじゆう市いち小姓せうじやう

となりくつゝ徳とく也や

文祿元年高藤陣の時こたか信のぶ小こ納のり

戸乃役とのえきと初はつめ肥ひ列りやう名な護ご屋やよりより家

慶長五年

台徳院殿宇うつのみや初はつ官くわんに市いち後ご向むかひ乃のと初はつ波なみ色いろ

山城やましろ守まも部ぶ少すくく徳とく也や

同十二年八月水野市みづのいち正ただみ少すくくく休やす見み

ト一尾仁左の光をアロ

此所こゝ番ばんと初はつじじと時とき祐すけ光みつ正ただ市いち正ただ

小ことつりて父ちちが喪もよよおもじじと初はつ次つぎ乃のと

下した二十日にじゅうにちとるとるく又また休やす見み小ことつりて

番ばんと初はつじじ

同十四年どうじゅうしにねん初はつ年ねん大おほ隅ぐも寺てら山やまにに住すまるるももかかり

番ばんと初はつじじと休やす見み小ことつりてとつりて市いち正ただ

と属ぞくしてして戸と正ただ市いち正ただと初はつ次つぎ乃のと

にによよりてて市いち番ばん乃のらら小こ休やす見みよりより戸と

よりより一いち所ところ初はつ次つぎととうううう市いち正ただ

ことわりて自殺トするはハ若重ハがハはみと
 六ハとハらハ年ハつハりハてハ二十ハ四ハ年ハ終ハ居
 寛永九年ハ石出ハさハらハく
 將軍家と縁ハなりて大御ハ為と初ハじ

重久ハ

若た清門

生息武列

寛永九年父光重ハと同ハく

將軍家と縁ハなりて大御ハ為ハ後と

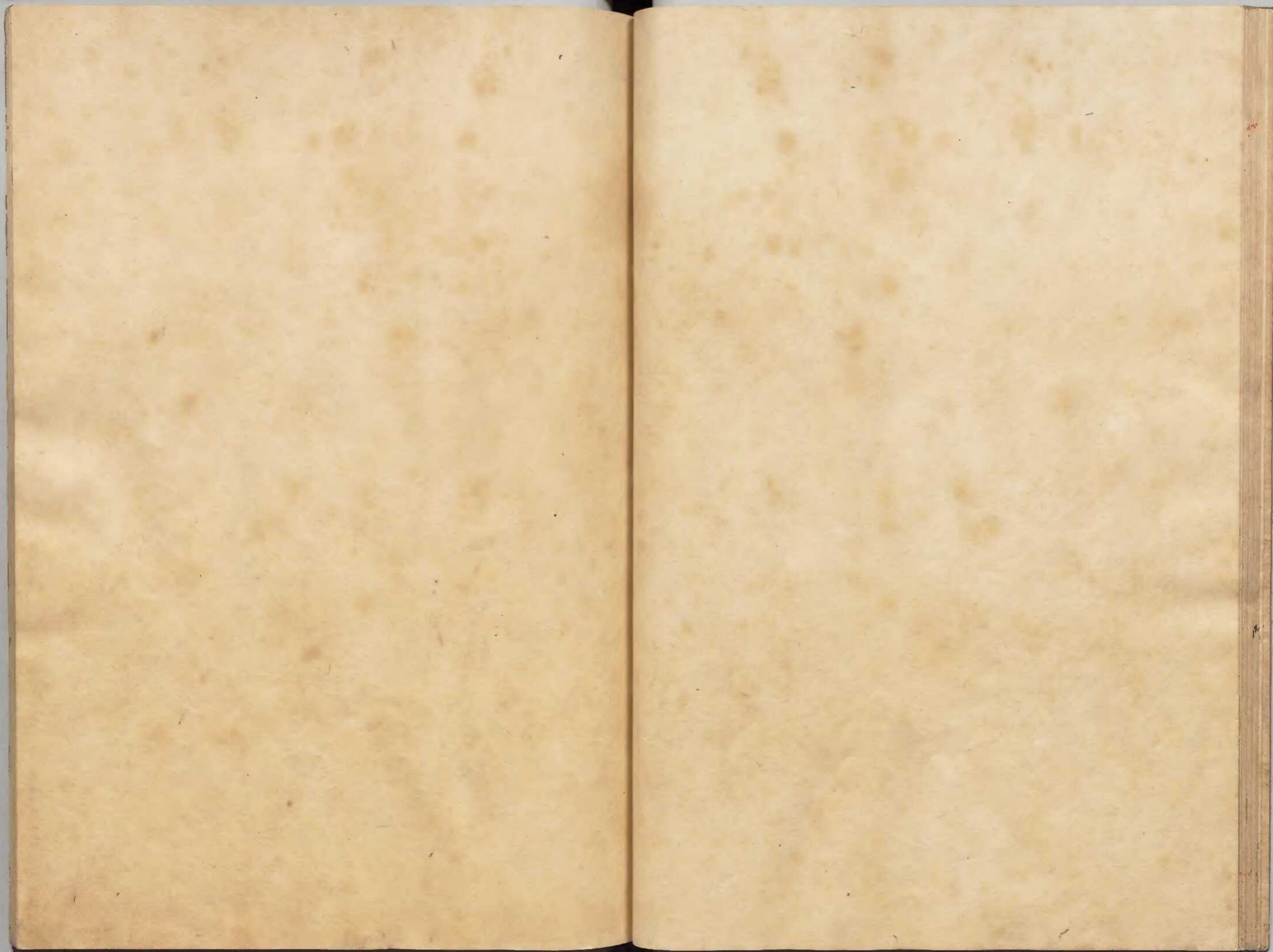
はとむ

小尾ハ家ハ紋ハ

割ハ菱ハ

津金ハ家ハ紋ハ

竹ハ小ハ羅ハ



系

官内くわい

系

それ

能登守のとのく

生國甲斐しやうこく

小尾こび

氏田うぢだ末流まゝりゅうなり世よ、甲州かうしゅう小尾村こびむらと
願ねがしし称なづ号ごうととを

武田信玄 湯頼小治
其ハ保科氏此子なり能也与男子なり
少レ此心とめと官内小毒阿之とく是
認と信と心
天正二年 長藤少く討死

正秀 まさひで

其也節 生也同也
其ハ小尾也物子なり官内又男子

なまゆへ正秀とむこして家督と譲る

天正十年

東照大権現小條氏と新府少く討陣
乃時江草此小屋とせめおとして首級と新
府ハ缺ト指小尾村よとく度と忠志の
る取中地とたまふ
系年六十二歳少く病死法名淨安

重正 しげまさ

正直 まこと

彦右衛門

生正 同家

ひこ 忠右 同家

三十六歳少く病死 法名 淨悦

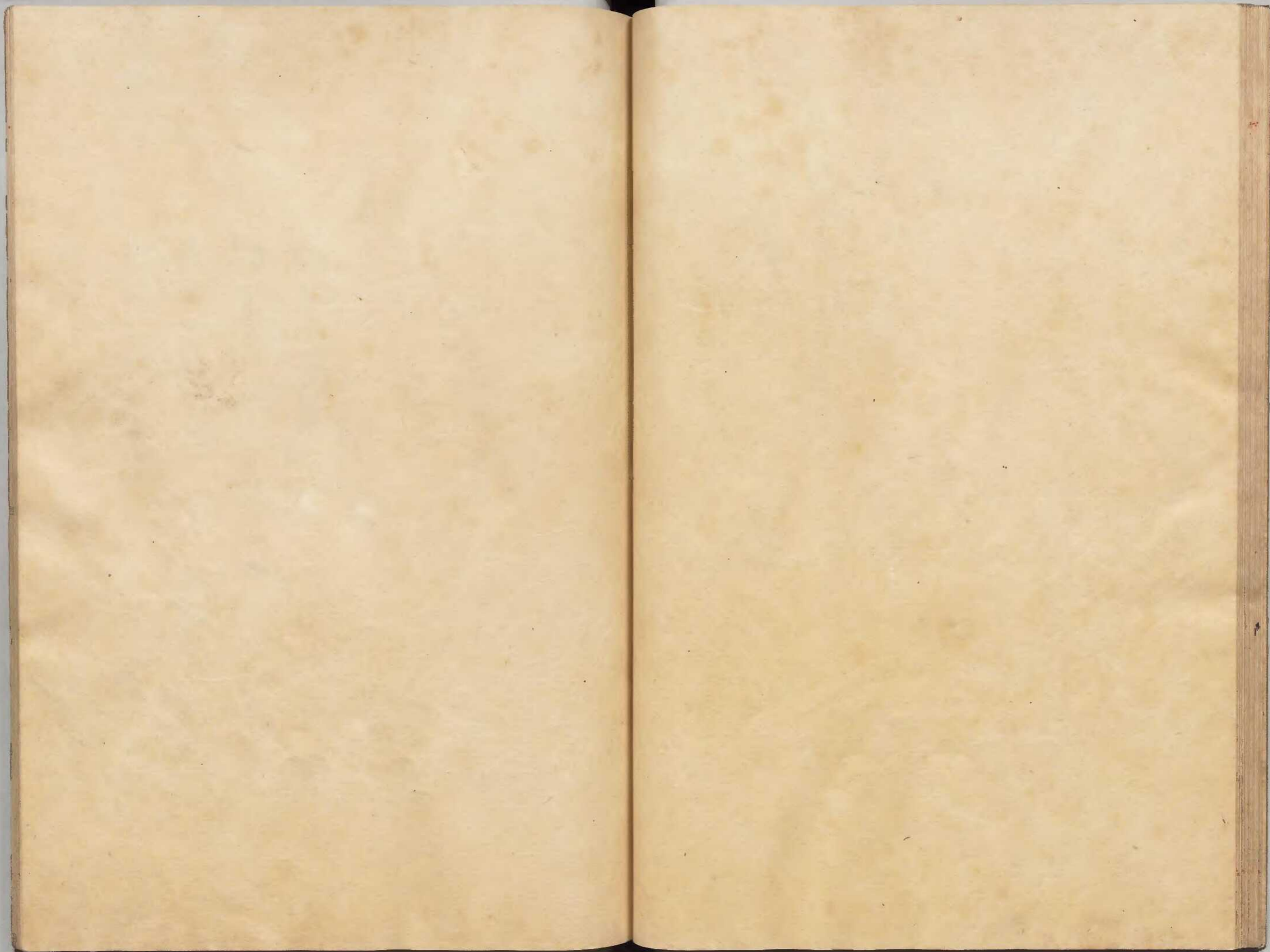
彦右衛門

生正 同家

寛永十九年十二月 石出さねく

將軍家と稱し 同家

二のえん 家紋 割菱



津金つぎ

初、浪船氏今、津金と号す

● 久直いさなと

浪船十郎左衛門

津金、美濃守胤時が女とめしむ

武田勝頼は、久直とを習とたり

天正二年五月廿一日、列上、篠合戦

乃とき、旗下一少く討死

久次 いさつ

又十郎

實ハ胤時なるとの子なり

姉乃丈久つとむ並な付つ死し乃の後のち務む頼のり久ひさ次つとむ之の跡あと

とほごーむ

天正十年二月あまのしんねん にがつ務む頼のり乃のがのちききくく甲か列れつ初はつ

備べい那な乃のおのももししくく時とき久ひさ次つとむ是こゝよりより三さんつつんんとと守まもりり

是こゝよりより三さんつつんんとと守まもりり本もと曾そ義ぎ昌昌がが母ははななるるびび小こ妻さい子こ

人質ひとぢとななるるくく甲か列れつ乃のりり久ひさ次つとむ先さき小こ尾お監かん抱ぶ

祐すけ光みつとと同どうくく二にとと向むかひひるるはは時とき殊ことごと戮よく寸すん

ををささ乃のむむひひととううけけくく相あ互ひぶぶががいいむむ

同年六月どうねん むねつき小こ糸いと氏うぢ並なはは合あれれ御ごハハ任にん列れつの

境さかいたた家いえ小こ乃のりり計けい策さくととめめららるるてて度ど々々也や

ととははりりてて久ひさ次つとむ等らととままりりてていいへへもも是こゝにに

並なせせどどてて監かん抱ぶ祐すけ光みつ修しゆ理り胤いん久ひさとと同どうくく

母ははななるるびび小こ妻さい子ことと人ひと質ぢ乃のち後のち列れつ一いつ封ふうして

東照大権現とうしょうだいこんげん之の属ぞく一いつををりりけけししるるをを忠ちゆう志しとと決けつ

東照大権現之属一をりけしるを忠志と決

感^ん多^らく御^ご朱^{しゆ}下^げとたまふ

同年

大権現御^{じま}馬^ばと甲^か列^{れつ}より出^いしたまふ小^こ條^{じょう}氏^し也^{なり}

為^な神^{かみ}子^こより發^{はつ}向^{むか}して射^や陣^{じん}乃^のと記^し江^え草^{くさ}根^ね小^こ

屋^や乃^の取^と出^い小^こ糸^{いと}より属^{ぞく}も久^く次^じ先^{せん}祐^{すけ}元^{げん}胤^{いん}久^く

大権現乃^{おほごんげん}治^ちとかり方^{かた}より先^{せん}乃^の案^{あん}内^{うち}者^{もの}と

なり江^え草^{くさ}とせりかきして新^{あらた}府^ふより治^ちを以^{もつ}て敷^{しき}

度^ど軍^{ぐん}切^き河^かる小^こより同^{どう}十^{じゅう}二^に月^{げつ}九^く日^{にち}御^ご朱^{しゆ}下^げと

たす川^{がは}より中^{なかつ}地^ぢと領^{りやう}をなす江^え草^{くさ}八^{はち}高^{たか}より本^{ほん}九^く

助^{すけ}毛^けと存^{ぞん}る

同^{どう}年^{ねん}信^{のぶ}列^{れつ}乃^の月^{げつ}より若^{わが}尾^お穴^{あな}小^こ屋^やより山^{やま}を

所^{ところ}不^ふく

大権現^{おほごんげん}より属^{ぞく}一^{いつ}存^{ぞん}る守^{まも}毛^けより川^{がは}より大^{おほ}久^く保^ぼより大^{おほ}

清^{きよ}乃^の友^{とも}治^ぢ大^{おほ}膳^{ぜん}柴^{しば}田^{でん}七^{しち}九^く高^{たか} 治^ちとけけたま

りて甲^か列^{れつ}先^{せん}方^{かた}原^{はら}若^{わが}根^ね下^{した}野^の玉^{たま}出^い書^{しよ}は金^{かね}一^{いつ}

堂^{どう}御^ご井^い一^{いつ}堂^{どう}今^{いま}福^{ふく}和^わ泉^{いん}工^{こう}友^{とも}一^{いつ}堂^{どう}を山^{やま}より

助^{すけ}等^らと引^ひぬく發^{はつ}向^{むか}乃^のと記^し久^く次^じより又^{また}毛^けより志^し

たがひ今年^{ことし}より明年^{あした}よりるく教^{しやく}度^ど合^あ戦^{せん}

り

同十二年七月さかして御合戦の時 作とありふ

川く真田さきのおえとて佐列さし後長ちか取出

とまのり御由陣乃後牧野まきの半右衛門はんえもん一属いちぞく

一して尾列おしり一官いちくわん乃番のばんと初つとじ

同十二年

大権おほいけん現げん告こと志し回まわはけりてとてとんと志し回まわ城じやう下げ

海野うみの河が大おほ手てよりつる時とき国くに八月はつげつ久次ひさし熱あつ胡こがせ

少すくく首くび級きゆうと得とくり

同十八年小田原御陣乃時告と岩付いわづきはけり

ハは方はた久次ひさし年とし若わか主ぬし討うがが銀ぎん一いち足あしよよおも

じじと大方おほはた曲まが輪りんは池いけ入いり城じやう兵へいははくく出いくく味あじ方かた

利りと一いちななんんととるる時とき小尾こお祐すけ光みつ津つ金かね藏くら久ひさ

ななららびびはは久次ひさしををここももちちりりととししてて終はつとと向むか

是こゝ久次ひさしははかかりりにに討うたた果はつめめ八はち

久清

劫あつとと清きよ

寛弘久次が曾なり久次親承して子たき成

大権現久清と小田原へ行くもき藤とた

まふそろち園東御入ふれと起武列鉞

取少く知行と深領を

天正十九年奥列九龍陣のとき

大権現よりさへひちりて岩手清より

文禄元年高篠陣のとき起山本帯刀御

普清を河とふ川と俣豆山より船板と

とこび出と付久清を此役と勤じ

慶長五年真田御陣乃時

右徳院殿此信守と勤じ

同八年甲列乃武川清金ハ信列乃境と

しそ中領地た家此るま可里よ浦色た

するさろじの成瀬年人大久保十吉清是

とうけたまは川と 約命と清の家小

久清甲列よおもじとく中領と深領を

同十二年甲列此城を午若主計以義直

御下屬を家より武川清金此法也 作と

加うあけく甲列乃城番と勅じ
同十六日二月十一日病死 年四十四

胤次

津金又十郎

生息武彦

治部と仰たためく津金と号す

大権現此作よりて父がまを跡と仰

是又七十九日大坂陣乃時浪行因情守

御命と仰けたす川く甲列乃城番と勅じ

小舟武川津金此法士と大坂より京回

山此先陣よりし

元和元年大坂陣此と浪行因情守

作より川く江列草津より来く甲列乃城

と号するゆい五月十二日城と因情守より浪

くいそまより方より川く二條御城少く

大権現と稱揚しなる

大権現豊師の後

右徳院殿と号しなりて甲列乃城番と勅じ

同二年忠名卿甲列と領と家時能次是也

此云

寛永十九年十二月十日

將軍家へ右出さし甲列中領乃地津全の

御とたまふ

家紋竹薙

竹薙

昌元

遊後

兼甲斐

武田信玄

務賴父子

野末前乃城

酒造

武田末葉

板垣越中守

酒造此御

昌光 まさひかり

清二郎 きよじろう

生島同家 なましまどうけ

信玄 のぶひら

信玄 のぶひら

天正二年 長藤よおわく討死 ちんてい ながふじのよ おわく うちくち

昌吉 まさきち

昌吉 まさきち

生島同家 なましまどうけ

東照大権現 甲州御入心乃と記 とうしょう だいこんげん こうしゅうごにいしん の と ぎ

享年 四十四歳 しゅんげい じゅうしよさい

天正十八年 小田原陣乃と記 てんしやう じゅうはちねん おだわらじん の と ぎ

文禄元年 名護屋陣乃と記昌吉御 ぶんろく げんねん なごやしじん の と ぎ 昌吉ご

留守 りうしゆ

天正五年 園ヶ原陣乃と記 てんしやう げんねん 園ヶ原じん の と ぎ

大坂あまの御陣乃と記 おおいさかあまのごじん の と ぎ

元和二年 げんわ じにねん

台徳院殿 たいとくゐん どの

同五年 病死 四十五歳 どうごねん びやくし じゅうごさい

昌次

新大橋門

生島武光

延享十二年 駿府よりおろく

大橋現と評しあり

大坂あたり乃御陣と傳へ

元和二年

右徳院殿より行へる

寛永九年

將軍殿より行へる

右政

新大橋門

生島武光

元和四年

右徳院殿より行へる

寛永元年

將軍殿より行へる

昌重

昌重

長壽

生國同家

寛永十四年 昌重十五歳に於て

將軍家より侍人 昌家

家紋

割菱

● 信春 のぶはる

高尾 たかお

武田たけだ北条きたうへ流りゅう今井いまいなりなり後のち下した河が守まもりり
て高尾たかおと稱なづ号なづを

二郎 じろう 隆興りゅうけい号ごう 甲斐かい守まもりり 後のち

新あらた羅ら之の郎らう 義光ぎこう 十二じふに世よ 武田たけだ 後のち河が守まもりり 信

義ぎ守まもりり 九く世よ の孫まご 後のち田た院いんと号なづを

信満 あきら

右衛門佐

甲斐安藝の守後

應永二十四年二月六日 本贖山よおぬえ

自害

信宗 あきら

今井孫六

左衛門

信満が四男

信経 しげ

刑部四郎

信慶

信是 しげ

左衛門

信隣 しげ

山城守

信昌 のち

刑部左衛門

信俊 のち

九左衛尉

兼甲別

信虎 信玄 信賴 之代 之代 之代 鐵炮

大將 となりて 駿河 田中 權代 となり

軍陣 におおく 教養 乃高 名河 乃 信

賴生 害乃 後

東照大権現 此より 一應 之代 之代

文祿四年 病死 時 七十五 歳

昌俊 のち

高尾 惣十郎

兼甲別

其ハ 今井 九左衛門 嫡子 なり 高尾 信實 也

高尾 子 となり 信實 之 子 也 高尾 信實 也

信實 守 本 姓 也 高尾 之 野 の人 なり

信玄 信賴 乃 流 文 二 世 あり

父信俊と相とに

大権現（石出）と相とに

天正十二年長久寺合戦乃時武名と

阿々八寸

文禄二年病死二十八歳

嘉文

如左

生後

大権現

台座殿

將軍殿（石）と相とに

慶長五年真田陣乃時信俊と相と

その

台座殿乃時幼氣と相とに

大坂冬陣乃時八松平周防守と相と

首尾と相とに

石久々（石）と相とに

その

忠正 ちゆうせい

却右衛門

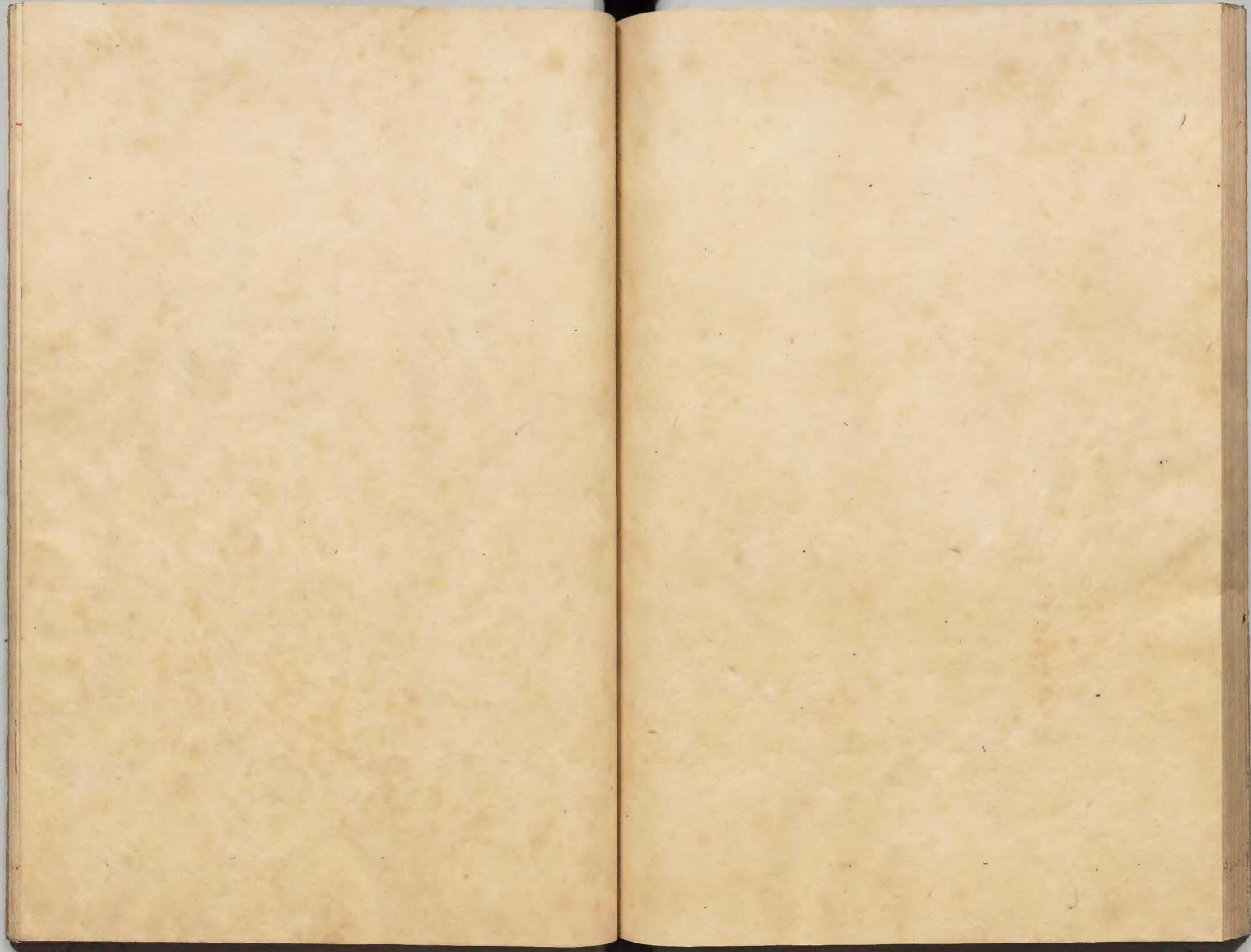
寛永十年病死時四十二歳

信正 のぶまさ

右大尉

將軍家と稱し
なり父忠正の養子と
稱す

家紋 いのん
割菱 わりびし



正吉 まさよし

長右衛門

生國之例

東照大権現（はく）あり

釣合えんあひより

御代官ごしろとあり

文禄元年ぶんろく病死びやうし年とし六む 結名宗源むすなむね

新見 にいみ

家傳けでんといく武田たけだのの彦流ひこりゅう

正重 まさしげ

平右衛門 生國同家

秀康卿 いへ やしきょう 一休云

慶長三年病死三十八歳 法名宗甫 しゅうか

正成 まさなり

平助 生國同家

為軍家 いへ 一休云

義清 よしか

右衛門 生國同家

大権現是列小師在國乃別 石出云 いへ

洋湯 よと

長久寺御合戦乃时首級得たり あき

外小田原陣 高藤陣 園ヶ原御陣 せきが

信春 のぶはる 一 軍功と云 いへ

慶長十二年十月病死年四十二

法名宗寛 しゅうくわん

正信まさのぶ

七右衛門 生國武苑

元和四年

台座院殿とありたり 家督とけり
同七年大御齋乃鉦よりけりたる

寛永十年二月

將軍家乃 鉦命より鉦以とたる

正勝まさかつ

大権現 生國之河

大権現を列し所を國乃列るるは後

列田中夏田乃所出る乃時信也

之後亦く所出るは是軍功とす

けし一 長久とあわく首級とるなり

大権現小幡北城所由陣けりて正勝とす

一て中多作左衛門方より鉄炮者百

挺うけたり 小幡乃城よりなることあり

とまらひとけたりとるは正勝

方より弓鉄炮^{やゐ}うけたり是將^{しやう}り一^{いち}連^{れん}
小橋乃^{こはし}城^{じやう}り^り
之後^{のち} 鉤^{かぎ}命^{めい}より^{より}大坂^{おさか}金^{かね}奉行^{やうぎやう}と
たると^と之^のも^も老^{らう}臣^{しん}より^{より}お^お公^{こう}所^{しよ}所^{しよ}治^ぢ
より^{より}寛^{かん}永^{えい}十六^{じふろく}年^{ねん}江戸^{えど}より^{より}想^{おぼ}り^りて^て海^{うみ}船^{ふね}
此^{こゝ}身^みとなり^りく^く相^あ州^{しゆ}忍^{にん}野^の村^{むら}より^{より}信^{しん}を^を

心盛^{しんせい}

海^{うみ}之^の部^ぶ 生^{なま}國^{くに}後^ご河^か

慶^{けい}長^{ちやう}十^{じゆ}年^{ねん}侍^{しやう}見^み小^こお^おあ^あく^く
大^{だい}権^{けん}現^{げん}と^と相^あ湯^{たう}を^を

心次^{しんじ}

勘^{かん}之^の部^ぶ 生^{なま}國^{くに}同^{どう}部^ぶ

参^{まゐ}り^り七^{しち}十^{じゆ}六^{ろく}年^{ねん}
台^{たい}西^{せい}院^{いん}殿^{でん}へ^へ出^でた^たれ^れ御^ご小^こ姓^{せい}組^{ぐみ}より^{より}
病^{びやう}死^し二^に十^{じゆ}八^{ぱち}年^{ねん} 信^{しん}右^う清^{せい}休^{きゆう}

正種^{しやうしゆ}

物取浦門 生國武義 じこ

よ 實ハと友と義子なり ま 西次郎一たひ

く子ととら ま 出友と何々 ま 新

見と称号とと

慶長十七年

右徳院殿へ右出され大御書此紙より入る

義心 よ

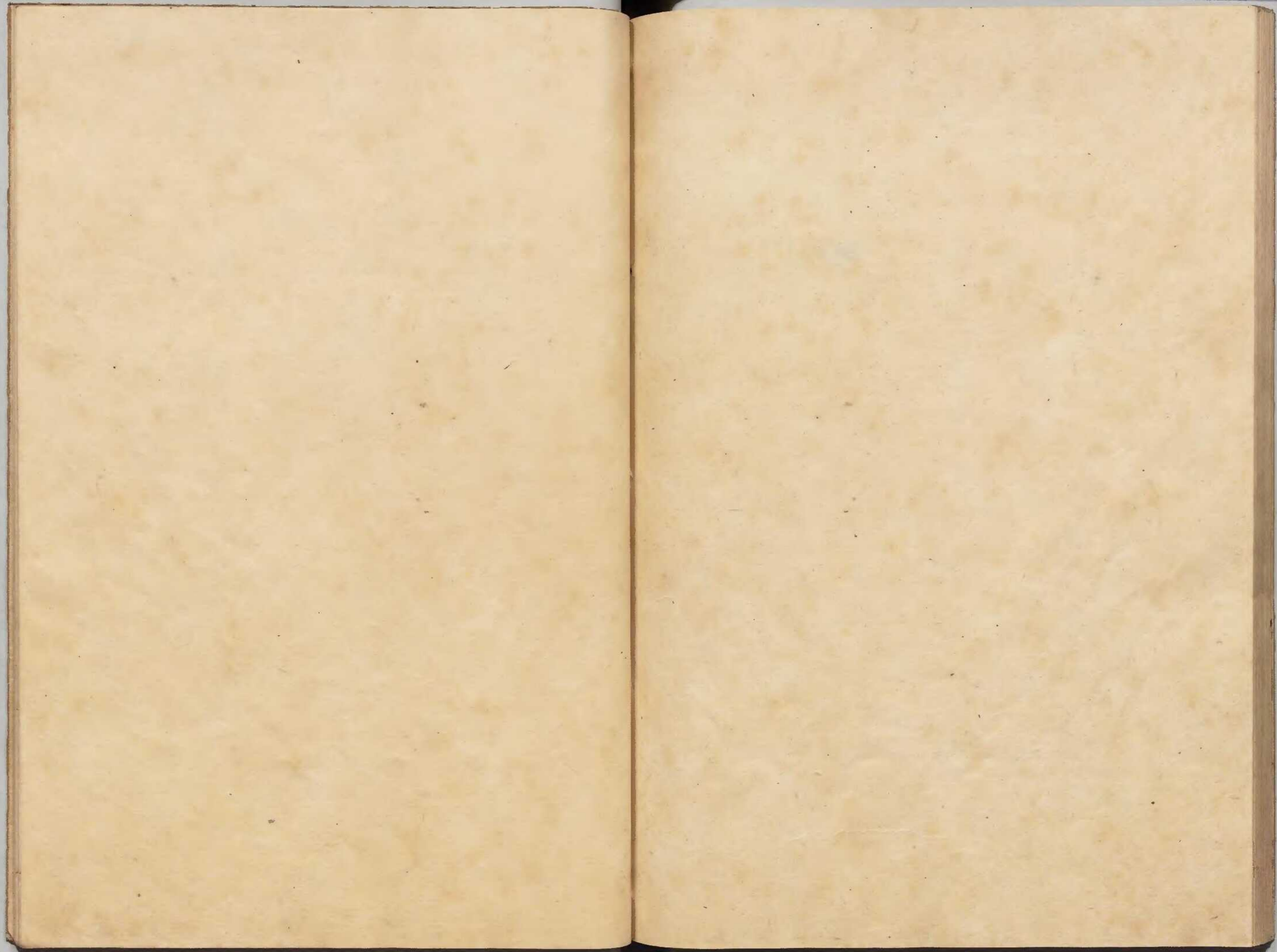
生七郎 生國山城 に

寛永十一年京二条乃御城より入る

將軍家とあり

同十三年大御書此紙より入る

家紋丸の内は片丸葉 り



新見 あらたみ

● 政成 まさなり

市右衛門 生國三列

大権現より此へなくす所なり

慶長十年七月十四日某日病歿

政務 まさむち

市右衛門

生國三列

文禄二年 えいりく

右衛門殿より此の如く申付る

元和六年病死時より四十二歳

正次 ただつぎ

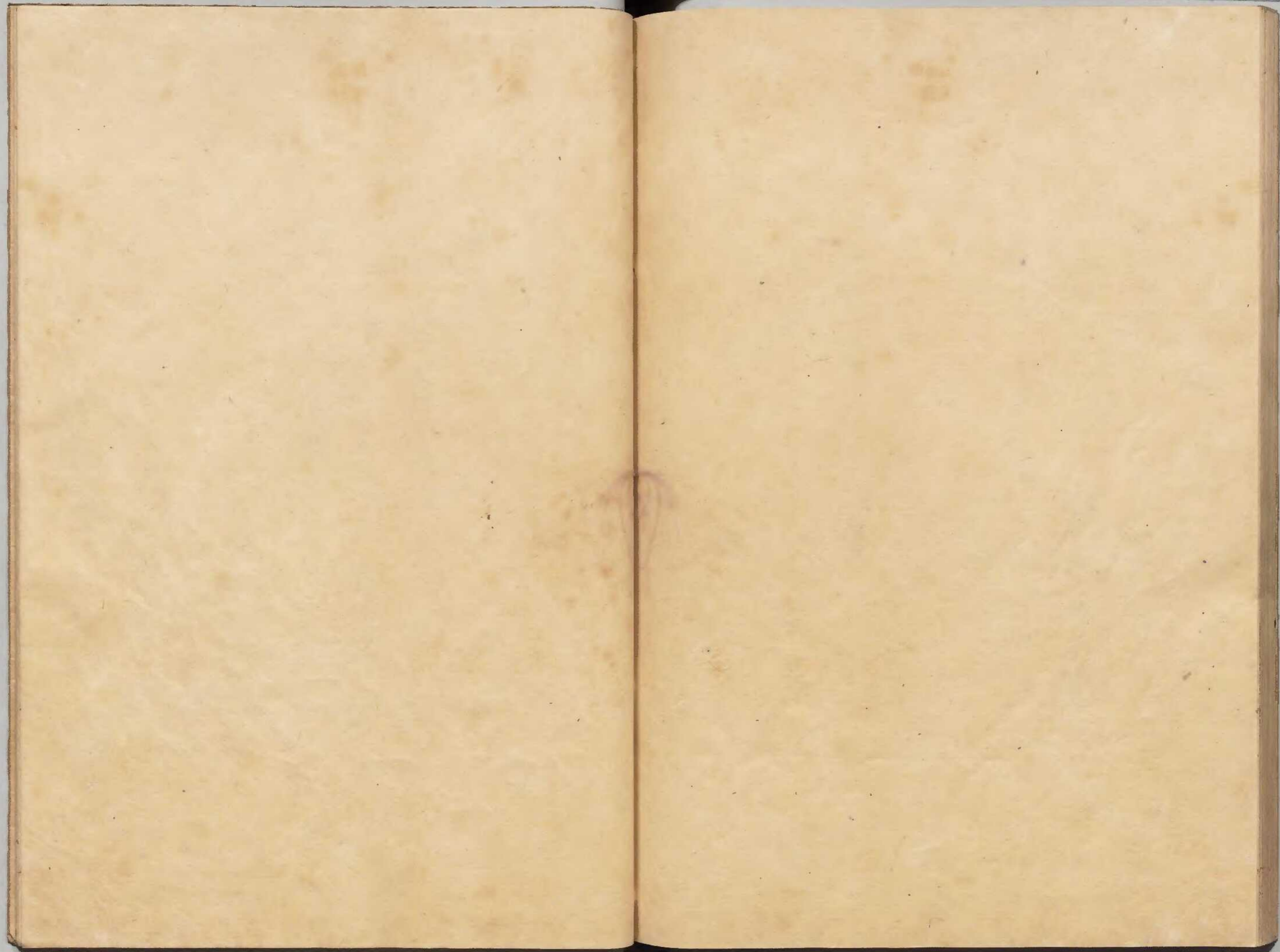
市右衛門

生玉武藏

元和八年

將軍家より此の如く申付る

家紋丸の内より けんぎ



系

牛具

初之枝武田の末流なり信玄小
治之と甲列牛具の末と願とら
ゆ牛具と稱号と

武田信玄

生武甲斐

武田信玄父子より

昌重

親負 生國同家

修玄より子

昌重

与之在邊 生國同家

修玄揚教父子より修玄

天正十年

東照大権現甲列御入出の時正出され也

湯一 生家

昌次

織部 生國同家

修玄揚教父子より修玄

大権現一修玄たぐり生家

昌重

甚く巫 生國同家

大権現

右源院殿（此人多く子家

昌成まさなり

七太夫 生國武家

右源院殿

右源院殿と存一子

昌次まさつと

右源太 生國同家

昌久

九郎右衛門 生國甲別

昌成

太郎右衛門 生國甲別

大権現

右源院殿（此人多く子家

昌次

大郎右衛門 兼 武藏

台座後殿

將軍邸（はく）

家紋丸の内より二川あり

いさご

